副鼻腔炎を合併したHIV感染症例

岡田弘子　飯塚　崇　村田潤子　池田勝久
順天堂大学　医学部　耳鼻咽喉科・頭頸部外科

HIV 感染症は，抗 HIV 薬併用療法によりコントロールが可能な慢性疾患となってきたが，それに従い HIV 感染者の副鼻腔炎症例も増加している．今回我々は副鼻腔炎を合併した HIV 感染症例を経験した．症例は 38 歳男性，主訴は鼻汁・頬部痛．他院にて慢性副鼻腔炎の診断で内服加療や上顎洞穿刺などの加療を行われるも改善が得られず，全身麻酔下での内視鏡下副鼻腔手術が予定されていたが，術前検査にて HIV 感染が疑われ当院へ紹介となった．CD 4 数 155 と低下がみられ，内科からは抗ウイルス剤使用にて CD 4 数が増加してからの手術をすすめられたが，疼痛が強く本人の強い希望があり全身麻酔下に内視鏡下副鼻腔手術が施行された．術後より左眼瞼の腫脹・38 度台の発熱がみられたが，PIPC/TAZ および TMP/SMX 投与し，約 1 週間でデータ・症状ともに改善し，退院となった．HIV 感染者では CD 4 リンパ球数が進行度のマーカーとされるが，低下により易感染性を呈し副鼻腔炎になりやすいといわれている．また，粘液腺毛性の輸送時間の延長や鼻咽腔リンパ組織の過形成も副鼻腔炎リスクの増加の原因となるといわれている．また AIDS 発症患者では急性浸潤型副鼻腔真菌症を合併すると予後が不良であるとの報告もあり，上気道感染症状のある HIV 感染患者に対しては早期に副鼻腔の精査が必要であると考えられた．また手術を施行した場合，易感染性について術後に注意が必要である．これらの点を含め，今回経験した症例を，副鼻腔炎を合併する HIV 感染に関する文献的考察を加え報告する．